

ジャン・デュビュッフェにおける物質性 —1945～50年代初頭「厚塗り」絵画をめぐって

小寺里枝 (京都大学)

1945年、フランスの画家ジャン・デュビュッフェ (Jean Dubuffet, 1901-85) は「厚塗り Hautes pâtes」と名付けた独特の手法を生み出し、一連の絵画シリーズ制作を開始した。砂や石膏、繊維といった素材が混ぜ込まれた厚みのある油彩面に、指や鏝、絵筆の柄によって象られたモチーフが浮き彫りとなるこれらの絵画においてとりわけ際立つのは、描かれたモチーフよりもむしろ、絵画作品そのものが持つ物質性である。当時のデュビュッフェによる芸術理念と実践において、このような特徴はいかなる役割を果たしていたのか。本発表では 1945～1950 年代初頭に焦点を絞り、デュビュッフェにおける物質性の問題を考察する。

1940年代半ばのデュビュッフェによる絵画実践については、1952年に批評家ミシェル・タピエが〈アンフォルメル〉の先駆とみなして以降、「画家の身振りを想起させる筆致」や「物質感の強調された不定形な絵画表面」といった側面が強調されてきた。こうした指摘はもちろん、的を得ていない訳ではない。しかし、これをもってサルトルによって謳われたパリ解放後の実存主義と結び付けられたり、造形的特徴の類似性という観点のみから、アメリカ抽象表現主義絵画や広範な〈アンフォルメル〉絵画と一括りにされたりする傾向は、あらためて批判的に考察されるべきだろう。というのも、当時のデュビュッフェ自身の記述からは、画家が物質や手の働きを強調しつつも、これらの見方とは異なった造形理念を持っていたことが明らかとなるからだ。

そのため発表においては、一連の「厚塗り」絵画のうち初期の数点を取り上げながら、ジャン・ポーランら文学者とデュビュッフェのあいだで交わされた当時の書簡、および画家自身による論考を紐解く。とりわけ考察の対象としたいのは、デュビュッフェが「厚塗り」絵画の制作を開始する直前に執筆した論考「知識人のための覚書」(1945年)である。同論考の内容については、これまでウィルソン(1993)やドラゲ(2001)によってガストン・バシュラールとの関連性が漠然と指摘されたことはあったものの、いまだ詳細な考察がなされているとは言い難い。芸術作品の生成が、芸術家の構想といった観念的側面からではなく、「素材」や「手」などの物質的側面から語られると同時に、「絵画の運動学」といった表現をもって作品受容の局面もが語られる同論考は、以降のデュビュッフェによる絵画実践の展開を再解釈する大きな手がかりとなる。

デュビュッフェの理念と実践における物質性をめぐる一連の考察においては、これまで関連づけて論じられることの少なかった戦前のパリにおける芸術・思想傾向とデュビュッフェとの関連性をも明らかにすることとしたい。